
野球少年リリカルゆうと

うさぎ症候群

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野球少年リリカルゆうと

【著者名】

Z7752T

【作者名】

つかさき症候群

【あらすじ】

野球が好きな少年・悠斗は海鳴の地でじつ過ぎしていくのか。

プロローグ（前書き）

処女作です

プロローグ

「お母やーん、 いの荷物どひむおけばいーー？」

少し大きめのダンボールを抱えた少年は、少年とも少女ともとれる
よつな少し高めの声を発した

「んー、 とりあえずリビングに置ことこちゅうだい」

「はーい」

少年は真新しいピカピカのフローリングの床を、あぶなげなく進んでいく

すでに開いているドアを進むと、大きめの体格のがっちらりした男性の背中が見えた

「おお、 悠斗か。 その荷物は？」

少し声の低い、件の男性が振り向きながら、少年・悠斗に向かって声をかける

「お父さん、 これコビングにひつてお母さんが」

「じゃあやじに置いて」

「はーい」

そつ音つと父は別のダンボールを手にコビングから出て行った

そして悠斗は部屋の隅へダンボールを置く

「あなた、悠斗、『ご飯にしましょ』」

いつの間にかリビングに戻つてきている母・綾香^{あやか} は大きめの声で 別の部屋へ行つた父にも聞こえるように 声をかけた

玄関にあつた大きな引越業者の車はすでに去つたようだ

「あとはリビングと玄関のダンボールだけか」

父・雅哉^{まさや}はあたりを見渡し言つ

悠斗は昼食の用意を手伝いながら、ここ海鳴^{新天地}と、この4月に入学することになつた私立聖祥大学付属小学校に胸を馳せるのであつた

プロローグ（後書き）

いろんな人のを読んでいるとつい書きたりました
2～3日に1回をめどに更新していきたいです（予定）

第1話～入学～（前書き）

予約
投稿

第1話／入学

籐洞 悠斗とうどう ゆうとは緊張きんちょうしていた

周りを見ると自分だけではないのが伺うかがえる

それは当然だろう

ほとんどの人がお互い知らない人であり、公立ならいと思われる、幼稚園保育園の同級生も私立ゆえにいないのである

本人たちにとつては長い時間だつただろうが、現実には数分もしないでドアが開いた

おそらく彼女が担任の先生であろう

その女性は柔らかな声で開口一番ひつ言つた

「では、体育館へ行きますよ~」

無事入学式も終わり 全員緊張でガチガチだったが
大抵の学校は今日は後は下校するだけである

しかし担任は今日の様子を見て思ったのだ

「これから自己紹介をしてもらいます」

自己紹介をするべしだと

・
・
・
・
・

「高町なのはです。好きな食べ物はショーケースです。よろしくおねがいします」

夕行にはいった自己紹介もだんだん慣れてきたのだろう、最初に比べてずいぶんスマーズになつた

最初はなにを言つたらいいのかという顔をしていた子どもたちも、好きなもの、将来の夢、いろいろ考えている顔をしている

「丹村すずかです。得意なことは運動です。よろしくおねがいします」

次は悠斗の番である

好きなことは決まっているので、頭で考えていた自己紹介を読み上げる

「藤洞悠斗です。好きなことは野球で、将来の夢もプロ野球選手です。よろしくお願いします」

自己紹介も終わり、解散を宣言され各自帰つていいく中で、トイレに行つており、変える時間がずれた悠斗は大きな声を聞いた

「痛い？でも大事なものを取られちゃった人の心は、もっともっとと痛いんだよ」

そこには今にも取つ組み合いを始めそうな栗色の髪と金色の髪をした少女一人と、その横でおろおろしている紫色の髪をした少女がいた

悠斗は平和主義者である

スポーツや、ルールの決まった競争事には本気を出すが、暴力を伴う行為は嫌いである

ゆえに

「喧嘩はだめだよー！」の子もおりおりしているだけじゃなくて、自分で言わないといつたわらなーよ」

口をだしてしまひのである

もともと、”子供の”喧嘩とこいつのは第三者が口をだすものではない

当事者で解決するのが一番なのである

だが、ここは私立である

少女たちは頭がよかつた

「や、やめてください」

紫の髪の少女が控えめに、しかしあまりした口調で言つと

「わ、わるかつたわね」

金色の髪の少女も自分が悪いのはわかったのだらう、バツの悪そうな顔をして言つた

栗色の髪の少女も

「ぶつてじめんね」

「い、いいわよ。わたしが悪かったんだから」

この様子を見て少年はひとつならずのであった

第1話「入学」（後書き）

自己紹介にアリサがないのはあいとうえお順で離れているからです

高町の「た」と月村の「つ」は近いんですけどね

それ以外の理由はありません

主人公が大人びてますが仕様です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752t/>

野球少年リリカルゆうと

2011年10月9日05時09分発行